国語〔前期A方式(1/29)〕

設問			解答例
一	問一	A	イ
		B	エ
		C	ア
		D	オ
		E	オ
		F	ウ
	問二	i	エ
		ii	オ
	問三	い	ア
		ろ	イ
		は	ウ
		に	オ
		ほ	オ
	問四	甲	オ
		乙	ウ
		丙	ア
	問五		オ
	問六		イ
	問七		ウ
	問八		ア
	問九		オ
二	問一		エ
	問二	①	オ
		②	オ
		③	オ
		④	ウ
	問三	I	ア
		II i	かはづ
		II ii	エ
		II iii	イ
	問四		エ
	問五		淵 が 馬 に や は ま る ら ん
	問六	a	エ
		b	エ
		c	イ
		d	イ
		e	ア
	問七	甲	ア
		乙	ウ

国語〔前期B方式(1/30)〕

設問				解答例
一	問一		1	2
			2	3
			3	4
			4	1
			5	4
	問二		6	2
			7	1
			8	4
	問三		9	3
			10	2
			11	4
			12	5
			13	1
	問四		14	4
			15	2
	問五		16	4
	問六		17	5
	問七		18	2
二	I	問一	31	4
			32	1
			33	2
			34	4
		問二	35	4
			36	2
			37	3
			38	1
		問三	39	4
			40	1
			41	3
			42	5
			43	2
		問四	44	4
		問五	45	1
		問六	46	5
	II	問一	47	2
			48	3
			49	5
			50	4
			51	2
		問二	52	5
			53	3
			54	4
			55	1
			56	2
三	問一		61	3
			62	5
			63	3
			64	5
			65	1
	問二		66	2
	問三		67	3
	問四		68	2
			69	2
			70	4
	問五		71	1
	問六		72	3
	問七		73	3
	問八		74	4

国語〔中期(2/16)〕

設問			解答例
一	問一	1	4
		2	1
		3	3
		4	4
		5	5
		6	5
	問二	7	2
		8	4
		9	5
	問三	10	3
		11	5
		12	2
		13	1
		14	4
	問四	15	3
		16	1
	問五	17	5
	問六	18	5
	問七	19	3
	問八	20	5
二	問一	21	1
		22	5
		23	2
		24	2
	問二	25	3
	問三	26	1
	問四	27	5
	問五	28	1
	問六	29	3
	問七	30	2
	問八	31	3
	問九	32	3

国語〔後期(3/8)〕

設問			解答例
一	問一	1	3
		2	2
		3	1
		4	4
	問二	5	2
		6	3
	問三	7	5
		8	2
		9	5
	問四	10	4
		11	5
		12	1
		13	2
		14	3
	問五	15	5
		16	2
		17	4
		18	3
		19	2
	問六	20	1
	問七	21	2
	問八	22	2
	問九	23	5
二	問一	24	1
		25	4
		26	1
		27	3
		28	2
		29	4
	問二	30	1
	問三	31	2
		32	1
		33	3
		34	5
		35	3
		36	1
	問四	37	1
		38	2
	問五	39	2
		40	3
		41	5
	問六	42	4
	問七	43	3
	問八	44	3

国語〔前期A方式 1／29〕

㈠

問五　傍線部の内容を問う問題。傍線部の「少女たらしめている」は、「少女であることを決定づけている」という意味である。つまり、傍線部では、少女がさまざまな感情を抱えていることこそが、「少女であることを決定づけている」すなわち「少女というものの本質」であると述べられている。よって、選択肢オが正解。ア・イ・ウ・エは本文にそのような記述はないので誤り。

問六　傍線部の内容を問う問題。傍線部の前の段落に「吉屋信子が掘りおこした俳人はいずれも、家元俳句、宗匠制度、結社の頽廃とは相容れない、強烈な個性の持ち主である」とあり、彼らは「伝統的な様式」を持つ俳句に取り組みつつも、「従来の様式」とは「相容れない」個性を持っていたことがわかる。さらに、傍線部の前の部分に「姉妹も幼なじみも～彼らにとって俳句の様式は、なまぬるい習俗などではなかった」とあり、吉屋信子が注目した俳人たちは、人生の中で経験した困難や孤独を昇華して、彼ら独自の作品を生み出していたことがわかる。よって、これらの内容を述べた選択肢イが正解。アは「吉屋信子が」「さらなる飛躍が可能になった」が、ウは「俳句に対して向けられていた同時代の批判を検討した」が、エは「フランス文学者である桑原武夫が、同じ文学の一分野である俳句を否定したことによって」が、オは「伝統的な様式を破壊したいという欲求を抑えきれず、その実現が可能になるように」が、それぞれ誤り。

問七　二重傍線部の内容を問う問題。選択肢ア・イ・エは本文の「女学生たちは同世代の異性たちから隔てられていたし、～その友とのオウライも結婚によって制限されることは多かった。彼女たちのいとなみは、たちはだかる現実のまえに閉ざされてみえるだけに、むしろその内圧は高く、たとえば少女雑誌を媒体として展開する幻想のネットワークは境遇を同じくする仲間をもとめて広範なものになった」と合致する。選択肢ウは、「受動的に受けいれた」の部分が、本文の「むしろその内圧は高く」「境遇を同じくする仲間をもとめて広範なものになった」と合致しない。選択肢オは本文の「作家の自覚のおよばない領域を、読みとってふくらませる読者たちがいた」と合致する。よって選択肢ウが正解。

問八　問題文の内容を読み取る内容合致問題。選択肢アは「文学的慣習の数々に敢えて反旗を翻そうとした」の部分が、本文の「吉屋信子の仕事が理論武装の結果でなしに知らず知らず挑発的な存在になっていた」と合致しない。選択肢イは、本文の「吉屋の仕事は、小説ジャンル中心の文芸観なり、～文学的慣行のひとつひとつに異和をもたらす」と合致する。選択肢ウは、本文の「異性愛の性役割とセクシュアリティとにたいする、強い異和の意識が、そのテキストに、おそらく作家自身にも自覚されずにいたであろう批評性と可能性とを、与えていた」「短篇群では、幻想味の勝った作品が印象深い」と合致する。選択肢エは、本文の「吉屋信子の仕事が理論武装の結果でなしに知らず知らず挑発的な存在になっていたという証でもあろう。職業的な批評家にとってはあつかいにくい、いらだたしい対象といえるかもしれない」と合致する。選択肢オは、本文の「あえてそのような俳人たちを選び、その生の軌跡とむかいあうことで、吉屋信子もまた鍛えられたというべきだろう」と合致する。よって、選択肢アが正解。

㈡

問四　傍線部の意味を問う問題。「はまる」は「(川などへ)落ち込む」の意味である。また、「ことわり」は「道理や筋道」の意味で、「ことわりなり」は「当然である。もっともである」という意味である。よって、傍線部は「馬が淵に落ちて溺れてしまうことはあり得ることだ」という意味になり、選択肢エが正解。

問五　傍線部の内容を読み取る問題。ねずみはAの歌を「しばらく吟じてみれども、淵が馬にはまるとは合点ゆかず(しばらく吟じてみたけれども、淵が馬に落ちてはまり込むことは納得できない)」が、「案ぜば合点参るべし(深く考えれば納得することができるだろう)」と考えた。つまり、歌の中の「淵が馬にやはまるらん」という部分が、ねずみが「案ぜば合点」できるだろうと考えた内容である。よって、正解は「淵が馬にやはまるらん」。

問七　甲群　波線部の直前に「ねずみは一間真中の板屋を立てて、世をのがれしが、悪念ふかきものなれば、ひと月こらへず俗になりしゆゑ、今にはつかねずみとて人なほ憎むなり(ねずみは四畳半の板屋を建てて出家したが、悪心が強く、一か月も耐えられずに俗世に生きる身に戻ったので、今だにはつかねずみといって人にますます悪口を言われている)」とある。よって、選択肢アが本文の内容と合致する。

乙群　波線部の前の文に「かへるは道心ふかく麦わらのしべにて家をつくり、あまになりて一生を過ごせりとなり。いまに子どもまでも『あまがへるどのはいつ死に給ひた』などいひてとぶらはれけると語りし(かえるは仏道を修めようという心が強く、麦わらの茎で家をつくり、出家し尼となって一生を過ごしたということだ。今だに子どもにまで『あまがえるどのは、いつお亡くなりになった』などと言って弔われた、と話した)」とある。よって、選択肢ウが本文の内容と合致する。

国語〔前期B方式 1／30〕

㈠

問四　X群　空所の前の文に「象徴は、もとは中国語にはなかった語で、シンボル(symbol)の訳語としてつくられたものだ」とある。また、空所の後の部分に「たとえば『鶴は千年、亀は万年』は、～鶴に千年、亀に万年生きるという意味を託して、長寿のシルシとしてきた」とあり、西洋の「シンボル」と同じように「抽象的な観念を物に置きかえて示すやり方」が中国にもあった具体例が書かれている。つまり、空所には、「象徴」ということばが中国になかったときもそのような表現が存在していたという内容が入る。よって、選択肢④が正解。

Y群　空所の前に「『日本語では自然と人間を重ねあわせる』も同じで」とあることから、その前の部分に着目する。そこでは、「外国人の研究者は、この動きを日本語の『ふつうの文章がもっているあいまいさ』によって説明しようとした。だが、日本語で主語が表面に現れないことや単数、複数を区別しないことなどは、日本人にとっては、少しも『あいまい』なことではない」、「『わび』や『さび』は～日本語そのものの性格によるものではなかった」と述べられている。つまり、筆者は「日本語」を「あいまい」なものとして説明することを「飛躍」だとして、否定しているのである。よって、この内容を述べた選択肢②が正解。

問五　傍線部の内容を問う問題。傍線部は、その後の部分で「天に書かれた寓話を地上に引きおろす」と言い換えられ、「詩による世界の精神革命を企てた」とも説明されている。また、傍線部の前の部分で「象徴主義の芸術は、そのような原始宗教的なシンボルを現代によみがえらせ、神秘的な雰囲気をだすことを尊んだ。その根には、キリスト教が邪教やイタンとして排除してきたさまざまな信仰を、芸術によって復活させる意図が潜んでいた」と説明されている。つまり傍線部は、詩によってキリスト教が絶対的なものではないことを示し、キリスト教以外の宗教的価値観を民衆にもたらす、という内容であるとわかる。よって、この内容を述べた選択肢④が正解。

問六　傍線部について筆者の考えを問う問題。傍線部の前の段落以降の文脈から、「象徴の美が日本文化の精髄だ」とする外国人の研究者や翻訳家の説明を「多くの日本人が鵜のみにし」「『神話』のようにしてしまった」ことを筆者は問題視していることがわかる。つまり、筆者は「日本人の専門家」がそうした言説に対して適切な対応をしてこなかった責任を問うべきだと考えているため、この内容を述べた選択肢⑤が正解。①は「日本語のあいまいさについてしっかりと研究をせず」が、②は「海外に十分な情報発信をしないできたことに」が、③は「積極的に支持してしまった」が、④は「象徴主義に基づいて研究することを怠ってきた」が、それぞれ誤り。

問七　二重傍線部について筆者の考えを問う問題。筆者は傍線部の考えに対し、本文の最後の段落で、「日本の詩歌や物語をヨーロッパ語に翻訳する際の苦労のあまり」「飛躍したことをいった」と述べている。つまり、「一定の理解を示し」つつ、やりすぎ(=勇み足)であったと考えているのである。よって、選択肢②が正解。①は「優れた発想であると評価している」が、③は「日本文学の解釈を改めるきっかけとなったことを称賛している」が、④は「日本人の間でも十分に理解の行き届かなかった概念を見直すきっかけになった」が、⑤は「失望を覚えている」が、それぞれ誤り。

三

問四　傍線部の理由を問う問題。傍線部の次の段落に「人間には、ほかの霊長類たちと比べると、新しい環境のほうを選好する『新奇探索性』を強く持っている人たちがいます。このために、なまやさしい環境には満足できず、あえて厳しい環境へ、ドーパミンの刺激を求めて飛び込んでいかずにはいられない、というのです」とある。よって、この内容を述べた選択肢④が正解。①・②・③・⑤は、本文にそのような記述はないので誤り。

問五　傍線部の内容を問う問題。傍線部の前の段落に「仏教の言い回しを借りれば、コントロールしきろうとする行為は『灰身滅智』と言います。欲望の種を滅することは自らの身を灰にまで焼き滅するようなものだというのです」とある。自らの「煩悩を完全にコントロールしきって断つ」ことは、自らの「心身を灰として無に帰」し、「存在を消し去る」ことと同じだというのである。よって、選択肢①が正解。②・③・④・⑤は、本文にそのような記述はないので誤り。

問六　二重傍線部の内容を問う問題。二重傍線部の後の部分で「人類の歴史が『弱み』を活かしてきた工夫の連続」であり、「『合理性』とはしばしば衝突する人間の『弱み』のひとつで」ある「新奇探索性」によって、人間は競争が激化しがちな「条件の良い場所」から拡散してきたことが述べられている。また、本文の最後の段落に「この『弱み』を、外部から適度なゆるやかさでコントロールすべく当てたパッチ(プログラムを修正するデータ)が、社会道徳であったり、〜倫理観であったりします」とある。よって、この内容を述べた選択肢⑤が正解。①は「人間は合理的な判断によってのみ発展することができる」「過去の記憶や歴史から得る教訓によって」が、②は「他者との非合理的・過剰な競争を生み出し続けてきた」が、それぞれ誤り。③・④は、本文にそのような記述はないので誤り。

三

問六　傍線部の意味を問う問題。「まもる」は「じっと目を離さずに見る。すきをうかがい見る」という意味。この場合は、「わが家を忍び出で、ただ一人、外の女房の所へ忍びやかに門を開けて内に(わが家を忍び出て、たった一人で、外の女の所で密かに門を開けて内側に)入った妻が「窓よりのぞきて(窓からのぞいて)」見ているので、後者の意味となる。さらに、「いかにわが姿美しければとて、人の夫を取るものか。あら恨めしや。情けなや(どんなに自分の容姿が美しいからといって、人の夫を取るなんてとんでもない。ああ、恨めしい。嘆かわしい)」と思っているので、この内容と合致する選択肢③が正解。

問七　本文の内容の読み取りを問う問題。本文では、女が乳母の桐壺を呼んで歌を詠み、会話した後に、「元の女房、これを聞き、なほも腹や立ちけむ。『あら腹立ちや。いで、取つて行かむ』と言ひて、間の障子を跳ね破り、内に乱れ入りければ(本妻は、これを聞いてますます腹が立ったのであろう。『ああ、腹が立つ。よし、連れ去ろう』と言い、間の障子を跳ね破って、中に乱入すると)」とあることから、選択肢③が正解。また、本文の冒頭に「かの半切取つて付け、赤頭かぶり、打杖とつて、わが家を忍び出で」とあり、妻は女をのぞき見る前に変装している。よって、①は妻が「女の美しさをのぞき見て」から「変装した」としている点が誤り。②は「夫は若い女のもとからも足が遠のいており」が、④は「自分の女房の桐壺」が、⑤は「心は人間の理性を保ち続けていた」が、それぞれ誤り。

国語〔中期 2／16〕

一

問五　空所補充問題。空所Xの前の文に「近年の研究では、明治初期の洋画家の間で流行した『テネブリズム(暗闇主義)』という西洋絵画の表現様式の影響の下に、〝光線画〟が登場したと説かれている」とある。この文から、〝光線画〟を描いていた清親も、洋画家の影響を受けていたと考えられ、空所の直前の「清親が同時代の洋画家のドウコウに関心をもっていたこと」は「容易に想像できる」ことである。よって、選択肢⑤が正解。

問六　二重傍線部について筆者の考えを問う問題。二重傍線部の前の部分に「〝光線画〟は、文明開化によって大量に流入するようになった西洋絵画や、写真、石版画や銅版画などから〜学び、浮世絵版画から続く伝統的な木版画の技術を用いながら〜光と影の表現が行われている」とある。また、「〝光線画〟では、光と影の表現のために空や雲の多彩な描写が行われており、清親の繊細な感性に注目したい」とある。よって、この内容をまとめた選択肢⑤が正解。①は「情趣よりも合理的な表現を追求した」が、②は「西洋絵画の新しい様式には批判的」が、③は「専ら西洋絵画の影響下にある水彩画の制作などに向かっていった」がそれぞれ誤り。④は本文にそのような記述はないので誤り。

問七　問題文の内容を読み取る内容合致問題。選択肢①は本文の「文明開化によって大量に流入するようになった西洋絵画や、写真、石版画や銅版画などから〜を学」ぶ一方で、「下級の幕臣」であった「生い立ち」から「強い江戸回顧趣味を感じさせる」作品も手がけ、「江戸懐古趣味をもつ文学者たちが、江戸の名残を留める東京の風景が描かれた〝光線画〟の〜魅力を再評価し、彼らの制作活動のゲンセンとした」と合致する。また、本文の「清親もまた幕臣としての苦しい時期を経たことで、維新後に絵師として再出発を果たした後も、江戸への深い哀惜の情と時流に流されて生きることへの諦観を抱き続け、また社会的な弱者や大衆に対する共感をもつに至ったのではないだろうか」という部分は、選択肢②・④・⑤の内容と合致する。なお、選択肢②は、「『近代画壇の巨匠』というような公的立場になることはなかった」という部分が、本文の「美術団体に属していない清親の作品が展覧会で発表されることはなく、あくまでも個人的な営みであった」とも合致する。選択肢④は、「大衆の期待に応えるような作品も作成しているが、そこには独特の感傷性が加味されている」という部分が、本文の「日清戦争を主題にする戦争画は、〜得意とする光と影の表現を効果的に用いて、感傷的な風景画にショウカされている」とも合致する。選択肢③は、「江戸情緒を哀惜するがあまり、新時代の時局に即した作品を作ることを拒否し続けた」という部分が、本文の「江戸から東京へと移りゆく風景を主題に、光と影の様相を細やかに描きとめた」と合致しない。本文では、「日清戦争を主題にする戦争画」のように「大衆の期待に応える時事報道的な主題」も描かれたことが述べられている。よって、選択肢③が正解。

三

問二　傍線部の理由を問う問題。傍線部の前の文に「秋はもののあはれもことなりけるに、月見るこそまたをかしけれ(秋はしみじみとした趣も格別であるが、中でも月を見ることこそ特に趣深い)」とあり、月のすばらしさについて述べられている。また、傍線部の直前に「月見る宵のほど(月を見ている夜のはじめ頃に)」とあるので、友人がやって来たのは、秋のすばらしい月を一緒に愛でようと思ったからであることがわかる。よって、選択肢③が正解。

問四　傍線部についての筆者の考えを読み取る問題。傍線部の段落に「待つ宵の月の名だたるこそをかしけれ。あすはいづれのかたにまからむに、誰々など思ひさだめたる、いとおぼつかなし(宵の月を待つことは名高く、趣がある。明日はどちらへ参ろうかと考えて、誰々を訪ねてみようと心に決めると、待ち遠しく不安になるものだ)」とある。また、傍線部の直後に「今のことの今にかはり行くこそ人の世のつねなりけめ(今起きていることが移り変わっていくことは、世にありふれていることであった

のだろう)」とある。つまり、「世の中は無常」であり、「明日も月が見られるとは限らない」ことを「不安」だと言っているのである。よって、選択肢⑤が正解。

問五　「残す」は「全部にしないで一部をおいておく」という意味なので、「月も少しばかり見残したらむ」は「月を満ち足りるまで鑑賞せず明日に楽しみを取っておくのは」という意味となる。また、「なほ」は「一層」、「心憎し」は「心ひかれる」という意味である。よって、傍線部は「今夜は月を満ち足りるまで観賞せず明日に楽しみを取っておくのは、一層心ひかれる感じである」という意味となり、選択肢①が正解。

問六　傍線部の意味を問う問題。「玉の台」は「立派な御殿」、「たのし」は「満ち足りている。裕福である」という意味である。また、「たのしき」の後には「人」が省略されているので、「玉の台のたのしき」は「立派な御殿に住む裕福な人」という意味である。傍線部の「べく」は可能を意味する「べし」の連体形であるため、「しるべくもあらざりけれど」は「知りようもないけれど」という意味である。よって、傍線部は「立派な御殿に住む裕福な人のことは知りようもないけれど」という意味となり、選択肢③が正解。

問七　傍線部の意味を問う問題。傍線部の「思ふべきくま」の「くま」には「心中に秘めたこと。秘密。悩み」という意味があり、「考えなくてはならない悩み事」を意味する。「さへ」は「〜までも」という意味なので、「心の中に気にかかることまでもない」→「心の中に何の気にかかることもない」となる。よって、傍線部は「心の中にも何の気にかかることもなくて」という意味となり、選択肢②が正解。

国語〔後期 3／8〕

一

問六　論の流れを踏まえて一文を補う箇所を問う問題。一文は、「反対意見を簡単に聞くことができる点がマスメディアと異なる」という趣旨なので、直前に「自分と意見が異なる相手を情報源に選ぶこともノーコストで可能である」とある【i】に入れるとうまくつながる。よって、選択肢①が正解。②・③・④の選択肢箇所は、その直後や直前で一文と同じ趣旨の内容を述べており、一文を補うと内容が重複して合わないため誤り。⑤の選択肢箇所は、その直前に「ネットの特性として〜一部の現象が全体の現象であるかのように大きく見えてくることである」とあり、一文の趣旨とは異なりネットの特性が話題になっているため誤り。

問七　傍線部の内容を問う問題。傍線部の後に、「ネットでは〜ノーコストで情報源の取捨選択が可能」なため、「自分と意見が異なる相手を情報源に選ぶこともノーコストで可能である」が、「マスメディアの場合は情報取得にコストがかかる」とある。つまり、ネットでは費用や時間などのコストがかからないため、「自分に合うものに限らず幅広い情報に触れられ取捨選択できる」のである。よって、選択肢②が正解。①は「自分に合う旧来の方法で情報を得ることにこだわった人もいた」が、③は「情報の質が劣るとしてもそれに頼る人が社会の多数派となっていった」が、④は「自分と同じ意見を集めるためには考え方が近い媒体を探し求めなくてはならず」「自分に合うものを取捨選択できる」が、⑤は「情報源をマスメディアからネットへ移行させる人が増えた」が、本文にそのような記述はないのでそれぞれ誤り。

問八　傍線部の理由を問う問題。傍線部の次の段落で「一方的な情報には人々は心理的に反発するという解釈」が説明されており、「自分の意見と反対側の意見を並列して比べ、そのうえで自分で考えて納得した時にだけ人は意見を変える」ため、「両側の意見を流した時に、意見の変化が起こった」と述べられている。このような意見の変化は、「相手の意見を理解したことによる歩み寄りなのであり、傾向としては穏健化となる」ため、この内容を述べた選択肢②が正解。①は「自身の成長を阻害する」「対立する意見をともに聞くことによって〜物事を大局的に判断できるようになる」「人格面での成長」が、③は「自身とは逆の意見を聞かされ続けることは精神的な苦痛を伴い」「両方の意見を聞くことができると苦痛は軽減され」が、④は「攻撃的な態度を和らげることになり」が、⑤は「過激な発言を聞き続けることは、心情的な疲弊を招き言動にも悪影響が出る傾向があるが、穏やかな論調の意見には自然と耳を傾けられ」が、本文にそのような記述はないのでそれぞれ誤り。

問九　傍線部の内容を問う問題。傍線部の後に、人々が「ネット上で自分に近い情報ばかりを選ぶこと」を「多くの悲観論者は」「予想し」ていたが、人々はそうせず、「民主主義が安定して機能するためには自分と反対の意見を知る必要があるが、ネットユーザはそれに〝見事に〟応えていた」とある。よって、この内容を述べた選択肢⑤が正解。①は、ネットとマスメディアの「片方に偏らない賢明さを持っていた」が、②は「反対意見に接する機会が増えると予想されていた」「自身に合う意見を上手に取捨選択して、持論を左右されない」が、③は「情報に振り回されると予想されていた」「自身に有益なものを取捨選択し、悪影響を与えられることのない」が、④は「好ましい情報を取捨選択することが困難になると予想されていた」「ネットの情報から過激な意見を区別して排除し」が、本文にそのような記述はないのでそれぞれ誤り。

二

問六　傍線部の内容を問う問題。女五の宮は「いともいともあさましく、いづかたにつけても定めなき世を、同じさまにて見たまへ過ぐす、命長さのうらめしきこと多くはべれど（とてもとても驚くほどの、どことをとってみても確かなもののない世の中で、同じような状態で過ごしてまいりました、寿命の長いことが恨めしいと感じることが多くありますが）」と述べている。この中の「いともいともあさましく、いづかたにつけても定めなき世」は、「院隠れたまひ（桐壺院がお亡くなりになり）」、光源氏が「知らぬ世にまどひはべりし（見知らぬ土地である須磨・明石に流離し）」たことを指している。つまり、これらのことを、女五の宮は「同じさまにて見たまへ過」ごしていたというのである。よって、この内容を述べた選択肢④が正解。

問七　傍線部の内容を問う問題。女五の宮は「かくて世に立ち返りたまへる御よろこびになむ、ありし年ごろを見たてまつりさしてましかば、くちをしからまし、とおぼえはべり（こうして政界に復帰なさったのはとても喜ばしいことです。あの時代を拝見したままで死んでしまっていたらどんなに残念だったかと思われました）」と述べており、「ありし年ごろ」は、光源氏が須磨・明石に追放されていた時期を指している。また、「山がつ」は「田舎に住む身分の低い人」、「くづほる」は「衰える」という意味であることから、「山がつになりて、いたう思ひくづほれはべりし年ごろ」は「田舎者となってひどく気落ちしていた年月」という意味であり、光源氏が、自らが須磨・明石に追放されていた時期を表現している箇所と分かる。よって、選択肢③が正解。

問八　傍線部の内容を問う問題。「ゆゆし」には「畏れ多い、不吉である」などの意味があり、傍線部では「不吉である」という意味で使われている。女五の宮は「童にものしたまへりしを見たてまつりそめし時、世にかかる光の出でおはしたることと驚かればべりしを、時々見たてまつるごとに、ゆゆしくおぼえはべりてなむ（子どもでいらしたときにはじめてお目にかかって、この世にこんなに美しい人がお生まれになるとはと驚きましたが、時々お目にかかるたびに不吉なまでに思われました）」と述べており、光源氏の容貌が子どものころから不吉に感じるほど傑出していたことが分かる。よって、この内容を述べた選択肢③が正解。